



AG-3DA1

“映像制作者への「ラブレター」「挑戦状」として” カメラの「個性」をインパクトあるカタチで表現

デモムービー「A Life About the Blues –ココロ、ハナレテ–」

パナソニックは、一体型二眼式 3D カメラレコーダー [AG-3DA1] の市場展開に向けて、同カメラの特性を伝えるデモンストレーションムービー「A Life About the Blues –ココロ、ハナレテ–」を制作した。

脚本・監督をばんば淳一氏、撮影監督を原イワオ氏がそれぞれ手掛け、従来のデモ映像とは一線を画したつくりとなっているのが大きな特徴。ベトナムを舞台に、1組の男女の心の機微を描いたストーリーが展開する。その中で、デモ映像としての機能訴求はもちろんのこと、登場人物の距離感や心情といった部分においても“3D だから出来ること”に主眼を置いた「表現」がなされており、このデモムービーが導入の後押しとなったユーザーも少なくない。

「[AG-3DA1] が持つ“新しさ”をいかに世の中に伝えることができるか、がミッションでした。撮影機材について語るとき、私たち映像制作者は半ば無意識的にまず画質を考えがちですが、このカメラを伝えるには“機動力”を真ん中に据えた方が良いと思いました」（ばんば氏）。

パナソニックからは、“テレビ番組やドキュメンタリー制作に向けた内容にして欲しい”というオーダーがあったという。ばんば氏は「この機動力とクオリティであれば、番組やドキュメンタリーだけでなく、インディペンデントの映画でも使えるのでは、と感じました。そこから、様々なジャンルの作り手に [AG-3DA1] が同時発生的に広がっていくことにつながるような物語性のある企画にしようと思いました」と話す。

ばんば氏、原氏ともに 3D 撮影は今回が初めて。「[AG-3DA1] のファーストユーザーというスタンスで臨



原イワオ氏 ばんば淳一氏



みました」と両氏は口を揃える。「その意味からも、同じ作り手の創作意欲を“刺激”するような映像にしよう、と。“作品”のニオイがあるデモムービー。いわばパナソニックから映像制作者に向けた“ラブレター”でもあり、“挑戦状”でもあるというような感じですね」（ばんば氏）。

同作品は、これまでの3Dコンテンツでは考えられないような映像表現で幕を開ける。ベトナム特有の人やモノ、さらには光源が混沌とする市場の中を、すり抜けるようにカメラが入っていく。「狭い路地や奥行きがある場所を手持ちの1カットで撮影することで、[AG-3DA1]の“個性”をインパクトあるカタチでメッセージできると考えました」とばんば氏。そのほか、移動撮影、ハイスピード、ブツ撮り、モノクロ…等々、デモ映像としての“機能”もストーリーの中に織り込まれている。

原氏は、「[AG-3DA1]は、色彩表現やマテリアルの質感など、狙い以上に細部のディテールを描写してくれるカメラでした。ただ、3D撮影の場合、揺れや回転など2Dと比べて撮影手法にいろいろな制約があることも確か。ですが、あまりそこだけを気にしては“作品”をつくることはできない。テレビやドキュメンタリー、映画の制作者たちは、様々な使い方でも狙いとする絵を追求する。そのときに、3Dだから出来ません、という“注釈”は通用しない。だからこそ、どこまで出来るか、にチャレンジしてみよう、と。技術説明に終始せず、作品の世界観・ストーリーを通じて[AG-3DA1]の特性が伝わるようなカメラワークを心掛けました」とし、ばんば氏も「3Dだからといって、いわゆる“飛び出し”を狙うのではなく、街や人が3Dだからこそ魅力的に映るような“作品”を目指しました」と続ける。

2010年は“3D元年”と呼ばれている。「今後、3Dがポピュラーな存在になったとき、“何を3Dで撮るか”が私たちの腕の見せ所になる。その中で[AG-3DA1]は、使い勝手の良さ・機動力・画質・価格も含め、3D制作の“先導役”を担う存在になるのでは、と考えています」と語る。